

漢語における「主謂謂語句」について (1)

鈴木 義 昭

現代漢語における「主謂謂語句」(主語述語構文が述語となる文)とは、

他身体好。(彼は身体が丈夫だ。)

北京的春天风沙很大。(北京の春は砂まじりの風がとても強く吹く。)

などのように、「他」(彼)・「北京的春天」(北京の春)が主語であって、「謂語」(述語)が「身体好」(身体が丈夫だ)・「风沙很大」(砂まじりの風がとても強く吹く)となる場合、謂語の部分がさらに、主語の「身体」・「风沙」となり、謂語が「好」・「很大」に分かれる文のことを言う。今、()内に示した日本語訳からも分かるとおり、日本語の「～は～が～」の構文、すなわち、

象は鼻が長い。

西洋人は色が白い。

などの構文ともかなり類似した点がある。

そこで本稿では、主謂謂語句に関する現段階における諸説の異同を(1)・(2)の二回に亘って報告する。そして、必要に応じて日本語の「～は～が～」などの構文とも比較をしてみたいと考える。

<1>

主謂謂語句という名称が初めて登場するのは、丁声樹・呂叔湘ら⁽¹⁾によって、1952年7月から翌53年11月まで、雑誌「中国語文」誌上で展開された「語法講話」においてであろう。前後17回に亘って連載された「語法講話」は、後に20章の章立てを持つ『現代漢語語法講話』として刊公され

る。²⁾「主謂謂語句」はこの第4章、「句子的基本文型」の中で、「体詞（名詞）謂語句」・「動詞謂語句」・「形容詞謂語句」とともに登場する。

こうした句式は『現代漢語語法講話』（以下、『語法講話』と略称する）が初めて発見したというわけではない。趙元任によれば、1921年にすでに陳承澤が唱えていると言う。³⁾ 黎錦熙は『新著國語文法』の中で、主謂謂語句という名称は用いないが、「部分同位」という形で説明している⁴⁾（1928年）。張志公はこれを「主謂仿語（連語）」と呼んだ。⁵⁾あるいは「子句謂語句」と言われたこともある。⁶⁾ 現在では『語法講話』の言い方が最も普遍的になっている。

ただ、主謂謂語句が単なる文法の術語としてではなく、広く人々の意識にのぼるようになったのは、雑誌「語文學習」編集部宛に寄せられた読者からの手紙に触発されてのことと思われる。⁷⁾ それによれば、「地里走出了一群累得晃晃蕩蕩的人。」・「車里走出了好些人来。」などの文章において、「人」を後置の主語と見る説と「賓語」（目的語）と見る二つの説があって、弁別に困難を来たすというわけである。ちなみに、前者は黎錦熙および「語法學習」の説であり、後者は『語法講話』および張志公『漢語語法常識』の分析法である。⁸⁾ これを承けて、1955年7月から翌56年12月まで、「語文學習」誌上で主語と賓語をめぐる討論が展開されてゆく。主語とはどういうものであるのか、また、賓語とは何か、謂語とは……。こうした認識なくしては真の意味での主謂謂語句問題も起こり得ないであろう。

主語と謂語の問題を扱った論著として、以下のようなものがある。前述の黎錦熙『新著國語文法』を始めとして、陳望道・方光燾・張世禄たちの『文法革新討論集』（1924年）、呂叔湘「從主語賓語的分別談國語句子的分析」⁹⁾（1946年）、邢公畹「說動詞的目的語兼論文法學的方向」¹⁰⁾（1948年）などが知られる。

解放後から1955年のこの時期までに出されたものとして、王力「詞和語在句中的職務」¹¹⁾（1952年）、張汝舟「談談『句子』構造」¹²⁾（1952年）、何

霽人・易剛・王泗原たちによる誌上討論¹⁰⁾ (1953年) などが著名である。

- 注(1) 丁声树・呂叔湘・李荣・孙德宣・管燮初・傅婧・黄盛璋・陈治文たち中国
社会科学院語言研究所語法小組のメンバー。
- (2) 「中国語文叢書」の一つとして、1961年12月、商務印書館より出版。
- (3) 『汉语口语语法』(1967年、商務印書館・訳者は呂叔湘) の脚注による。
- (4) 同書(商務印書館)
- (5) 『漢語語法常識』第三章、「句」等に見える。
- (6) 黎錦熙・前掲書。また、洪心衡『漢語語法問題研究』(1956年9月、新知識出版社) にも見える。
- (7) 「中国語文叢書」『漢語的主語賓語問題』所収の「語文学习」編輯部、「主語賓語問題的討論」による(1956年12月、中華書局)。
- (8) 『漢語語法常識』(1953年11月、新知識出版社)
- (9) のち、『漢語語法論文集』(1955年4月、科学出版) に取められる。
- (10) 「國文月刊」第70期所載
- (11) 「語文学习」, 1952年7月号
- (12) 「語文学习」, 1952年第号8
- (13) 「語文学习」, 1953年第1・2号

<2>

『語法講話』の中で、主謂謂語句は甲類・乙類・丙類の三種類に分類される。すなわち、

甲類：主謂謂語中の主語と全句の主語有关系（主謂謂語中の主語は全文の主語と関連がある）。

例）張排副以前の確体格挺棒（張排副は以前全く体格がすばらしくよかった）。

乙類：主謂謂語句全句の主語在意义上是主謂謂語の受事（主謂謂語句全文の主語は、意味の上から主謂謂語の受事〔客体〕である）。

例）同志們，送給你們的两个模範乡的小册子，你們大概看到了吧（同志のみなさん、あなたがたに送った、二つの模範郷の小冊子は、あなたがたは）多分読んだことでしょう）。

丙類：主謂謂語当中常常有“也”字，“都”字，其中的主語对謂語講

是受事（主謂謂語中には〈也〉・〈都〉という字がしばしば見受けられるが、その中の主語が謂語について述べる時は受事である）。

例）我相信你，你什么都懂，什么都知道（私はこう確信している。

あなたは何でも理解し、何でも知っている）。

このうち、甲類については諸家の意見が大概一致するところである。黎錦熙は「王冕天性聰明，……」⁽¹⁾（王冕は生まれつきの性質が聡明で、…），呂叔湘は「中國地大物博」⁽²⁾（中国は土地が広く物資が豊かである），張志公は「李之祥運氣好，老婆不錯」⁽³⁾（李之祥は運がいいことに、女房がいい），王力は「狗兒名利心重」⁽⁴⁾（犬は名利心が篤い。）等の例文を挙げる。それぞれ、「張排副」・「王冕」・「中國」・「李之祥」・「狗兒」は全文の主語で、「体格挺棒」・「天性聰明」・「地大物博」・「運氣好，老婆不錯」・「名利心重」が謂語となり、「体格」・「天性」・「地」・「物」・「運氣」・「老婆」・「名利心」という主語と「挺棒」・「聰明」・「大」・「博」・「好」・「不錯」・「重」という謂語に分析できる。日本語の「象は鼻が長い。」の構文と全く同じと考えてよいであろう。

日本語では「象は」の部分に「主題」とし、「鼻が長い」の部分に「叙述部」としているわけだが、「は」、「が」という助詞の職能を手掛かりにできるのと違って、漢語では位置関係と厳密な意味の吟味を行なわねばならない。例えば、『語法講話』は「張排副的体格以前の確挺棒。」と比較する。語の位置が変わると意味まで変わってしまう。これについては後述するが、⁽⁵⁾明らかに主語の陳述の対象が異なってくるのである。もちろん、「張排副以前の確棒体格。」もこのままでは成立しない。⁽⁶⁾ここで言う位置関係とは、以上のような点を指すわけである。

また、乙類の例として、前掲例文の他、

窗戶誰叫打开的？（窓は誰れがあげさせたのだ？）

她的东西，我可以派人給送去（彼女のものは、私が人に持たせてやってもいい）。

を挙げる。「送給你們……」・「窗戶」・「她的東西」は「看到」・「打开」・「送去」の受事であるとともに、全文の主語として「討論の対象を提出する」というわけである。

丙類は、

我上海也到过，天津也到过，几个大商埠都到过（私は上海も行ったことがある，天津も行ったことがある，いくつかの大通商都市はどこも行ったことがある）。

を挙げる。丙類が成立するには、「也」・「都」という字があって、主語が謂語の受事ではなくてはいけないとするが、乙類とともに異論のあるところである。

黎錦熙，王力，呂叔湘はいずれもこの種の句式を賓語の倒装（倒置）と取った。⁶⁾ 呂冀平の「主語和賓語的問題」⁷⁾によれば，賓語——主語——動詞ということになる。それに対して、『語法講話』のそれは，主語——主語——動詞の構造と理解したわけである。しかし，この乙・丙両類については、

乙丙两类主謂謂語句，有些句子可以解釋成賓語倒裝（乙・丙二類の主謂謂語句は，文によっては賓語の倒装と解釈することができる）。と補っているように，今一つ明快さに欠けていることは事実であろう。恐らくは語の位置関係による類別と意味内容による類別との兼ね合いに解決がつかなかったものと思われる。

『語法講話』とは若干の距離を置きながらも，結果的にはそれと似た結論になったものとして，張志公の「變句式」がある。⁸⁾ 例えば、

我不喝酒，吃点儿饭（私は酒を飲まず，ちょっとごはんを食べる）。の文に対して、

酒，我不喝，饭，吃一点儿（酒は，私は飲まない。（しかし，私は）ごはんはちょっと食べる）。

我酒不喝，饭吃一点儿（私は酒は飲まないが，ごはんは食べる）。

という二つの文があって、「酒」・「我」が主語で、謂語が「我不喝」・「酒不喝」であり、さらに謂語が「我」と「不喝」・「酒」と「不喝」に分けられる時、これを変句式と呼ぶというのである。呂冀平の前述の表で言うところの、主語——主語——動詞に分類されるものであるが、『語法講話』の甲類に当る例については言及がない。

なお、日本語で、

窓は彼があげた。

ビールは私が飲んでしまった。

私は上海も行ったし、北京も行った。

という時、「は」はいずれも「取り立て」と説明されるが、目的語の代行という説もあった。⁹⁾これによれば、上記二例はまさにこれと規を一にする。また、漢語の「也」は「も」に相当する。もし、日本語で、

私は上海は行ったし、北京も行った。

とするならば、「私は」の「は」が提示で、「上海は」、「北京も」の「は」と「も」は対比になる。

注(1)『新著國語文法』による。

(2)『語法學習』および『語法修辭講話』(朱德熙と共著 1952年12月、開明書店)による。

(3)『漢語語法常識』による。

(4)『中國語法綱要』(1946年、開明書店、今上海教育出版社、1982年版による)。

(5)張排副以前の確是挺棒体格(的)。のように、是字句に変えねばならないが、そうすれば、句式は明らかに違ってしまふ。

(6)注(1)~(4)の各書および呂冀平「主語和賓語的問題」(「語文學習」・1955年7月号)による。

(7)「主語和賓語的問題」(「語文學習」1955年7月)による。

(8)『漢語語法常識』による。

(9)『日本語教育辭典』による。

< 3 >

主語賓語論争が終焉を迎えると、主謂謂語句に対する論及も極めて少な

くなった。例えば、『暫擬漢語教學語法系統』⁽¹⁾や北京大學編『現代漢語』⁽²⁾においても、ほんのわずかにしか触れられていない。その他、趙榮普「从動謂句的動詞重復談起」⁽³⁾およびそれに対する意見を述べた二論、「还是偏重了邏輯」(劉凱鳴)、「不能否認“小主語”」(鄧劍文)⁽⁴⁾中に見えるだけのようである。

文化大革命・四人組時期の空白を経て、本格的に主謂謂語句を論じたのは、江天の論文「談主謂詞組作謂語」⁽⁵⁾であろう。彼はその中で、次のように現状分析をしている。

主謂詞組作謂語這種語言現象，語法學界認識得較晚，因而它的範圍究竟多大，規律性的東西有哪一些，研究得還不夠全面，不夠系統（主謂構文が謂語となる言語現象は，文法學界で知られることが比較的遅かった。そのため，範圍がどれほどなのか，法則的にはどのようなものがあるのか，全面的かつ系統的な研究が十分になされていない）。

つい最近出された論文に、孟維智の「主謂謂語句的範圍」⁽⁶⁾がある。その中で、

关于主謂謂語句的範圍，語法學界意見一向不一致。近年出版的几部現代漢語教材，所劃範圍雖然仍有出入，但是都比早先擴大了（主謂謂語句の範圍について，文法學界の意見はこれまで一致していない。近年出版された現代漢語の教材のいくつかにおいて，範圍はやはり出入が見られるようだが，いずれも以前に比べて拡大されている）。

と述べている。ともに主謂謂語句の存在を認める立場を取ってはいるが、その分析・位置づけの困難さをいみじくも語っている。江天の先行論文がありながら、孟維智が「以前に比べて拡大されている」と不満を隠さないのは、両者の立場に違いがあるからである。詳しくは次号の〈4〉で比較しながら検討することになるが、江天が大別して3種類、細かくは6種類を主謂謂語句と認めるのに対して、孟維智は3種類説を取る。以前『語法講話』と王力・呂叔湘の立場があったのとよく似ている。

しかし、呂叔湘もそれを認めた上で、

汉语里边有主谓谓语句，现在已经没有人否认了。可是这种句式的范围有多大，内部结构能复杂到什么程度，看法还不一致（漢語の中に主謂謂語句があることを，現在もはや何人たりとも否定できなくなった。

しかし，こうした構文の範囲がどれくらいなのか，内部の構造がどの程度まで複雑になっているかについて，見方はやはり一致しない）。

と言う⁽⁷⁾わけで，その有効な範囲が求められているのであろう。

こうした意味で，多くの研究者が論じるようになって来た。専論としては，江天「談主谓词组作谓语」，孟维智「主谓谓语句的范围」の他に，史存直『语法三论』中の「对主语宾语问题的初步考察」⁽⁸⁾・鄧福南『汉语语法专题十讲』中の「主语和宾语的问题」⁽⁹⁾などがある。また，漢語参考書，教科書の類いでは，江天『現代汉语语法通解』⁽¹⁰⁾，鄧福南等編『汉语语法新編』⁽¹¹⁾，劉月華等編『实用现代汉语语法』⁽¹²⁾などが，かなり多くのスペースを割いている。少くともそれに対する記述を持つものは枚挙に暇がないとさえ言える。多くのスペースを割くということは，積極的に認め分類する立場であるが，その中の劉月華『实用现代汉语语法』の概括が簡にして要を得た記述を行なっているので，以下に挙げておく。

由主谓短语作谓语的的句子叫做主谓谓语句。这种句子是汉语特有的一种句子类型。其谓语本身又包含主语和谓语两部分。为了区别全句的主语，谓语当中的主语、谓语，我们把前者称为大主语、大谓语，后者称为小主语、小谓语。大主语和小主语或小谓语之间有一定关系的。主谓谓语句的谓语主要说明或者描写的句子（主謂の短語が謂語となる文を主謂謂語句と呼ぶ。こうした文は漢語特有の文の類型である。その謂語自体も主語と謂語の二つの部分を含んでいる。全文の主語・謂語および謂語の中の主語・謂語を区別するために，我々は前者を大主語・大謂語，後者を小主語・小謂語と呼んでいる。大主語と小主語あるいは小謂語の間には必ず関連があるのである。主謂謂語句の謂語は主に主

語を説明したり描写するものなのである)。

この説はほとんど江天の説と一致するから、詳しい吟味は〈4〉以降で行なうことにするが、細部において必ずしも一致しないのは、まさに呂叔湘の指摘にあるとおりである。 (続く)

注(1) 『現代汉语』が完成するまで暫定的に行なわれた教科書。

(2) 1962年4月, 新华书店

(3) 「中国語文」(1958年第2期)

(4) 「中国語文」(1958年第6期)

(5) 原載『辽宁大学学报』(1978年), 今『現代汉语資料選編』(罗常琦等著・甘肃人民出版社・1981年6月)による。

(6) 『语法研究和探索』2所収・北京大学出版社, 1984年4月

(7) 『汉语语法分析问题』・商务印书馆・1979年6月

(8) 上海教育出版社・1980年1月

(9) 湖南人民出版社・1980年6月

(10) 辽宁人民出版社・1980年12月

(11) 湖南教育出版社・1983年5月

(12) 外语教学与研究出版社・1983年4月